

第114回山口西田読書会（前回113回5月21日のプロトコル）

参加者：岡部、桑原、橋本、佐野、唐露

1. 『善の研究』第3篇第7章、第8章第2段落を読了
2. テキスト要約

第3篇第7章「倫理学の諸説 その三」

人性より善を説明せねばならぬ自律的倫理学は三種あって、一は合理説或いは主知説（理性を本とするもの）といい、一は快樂説（快樂の感情を本とするもの）といい、また一は活動説（意志の活動を本とするもの）という。

合理的若しくは主知的倫理学は、物の真相が即ち善であると主張し、道徳上の善悪正邪ということと知識上の真偽ということとを同一視してゐる。そして真理なる故に善行をしなければならぬ。合理説は理の一般性に基ついて、道徳法の一般性を説明し義務の威厳を立せるが、これをもって道徳の全びょうを説きえたるもとなれぬ。まず、純粹なる形式的理解力は単に形式的理解の法則を与えることができるが、内容を与えることはできぬ。倫理学において原則を定むるものは内容そのもの即ち我々の感情または欲求である。次に、意志は感情または衝動より起こるので、論理の判断は必ずしも意志の原因とはならぬ。そのゆゑ、合理説論者は善をなさねばならぬ所以を説明することができぬ。

理論的方面の代表者はクラークであつて、実行的方面を代表するものは犬儒学派である。この派の道徳の目的は単に情欲快樂にかちて精神の自由を保つということのみであつた。ストア学派は最上の善は内心の自由と平靜であると主張して、犬儒学派と同じく、すべての情欲を排斥して単に無欲たらんことを務むるようになった。

我々が更に何らかの大なる目的の求むべきものがある所以で、情欲に打ち克たねばならぬ。単に上述の学派のごとく全然情欲に反する純理をもって人性の目的となり、情欲を制するのが善であるといへば、これより不合理なることはあるまい。

第3篇第8章「倫理学の諸説 その四」第1～2段落

意志は形式的理性よりではなくすべて快樂の感情より生じるので、意志の目的は畢竟快樂のほかにはない。それで、快樂をもって人性の唯一の目的となし、道徳的善の區別をもこの原理によりて説明する倫理学は、快樂説という（即ち快樂＝善である）。この説には二つあって、一を利己的快樂説といい、他を公衆的快樂説という。

利己的快樂説は自己の快樂をもって人性唯一の目的となし、最大なる自己の快樂が最大の善であるとなすのである。この説の完全なる代表者はギリシャにおけるキレーネ学派とエピクロースとである。純粹なる快樂説の代表者といえるアリスチッポスは快樂はいかなる快樂でもすべて同一の快樂であり、ただ大なる快樂が善であると主張し、積極的快樂を尚び、瞬間の快樂を重んじた。これに対して、エピクロースは一生の快樂を重しとし、消極的快樂（苦悩なき状態）を尚んだ。彼の最大の善というのは心の平和ということであるが、到底彼の根本的主義は利己的快樂説で、また隱遁主義と言へる。